

高精細デジタル画像の応用に関する調査研究 (①情01-07-2/5)

目 的

本研究では、前中期5年において開発した画像形成方法を踏まえ、着色仏画・彩色壁画・油彩画・日本画・漆絵などの美術品を対象とし、それぞれについて、(1)光に対する物性の検討、(2)光物性の画像化に関わる技術開発、(3)形成画像の汎用的な活用法(表示・出力)に関する条件整備を行い、広範な文化財研究を支援するために不可欠な研究画像を形成し、それらを応用・利用する方法を探ることを目的とする。

成 果

1. 他機関との共同研究：本研究は、先の中期計画において開発した画像形成技術を用いた画像の汎用的な活用・運用を行う方法・技法の研究に重点を置いている。平成17年度に行った奈良国立博物館との薬師寺蔵「吉祥天像」の共同研究の報告書、及び平成18年度から彦根城博物館と共同で行った国宝「彦根屏風」の調査報告書を刊行した。平成17年度に国立故宮博物院(台湾)との共同研究として行った孫過庭筆「書譜」の成果については、平成20年度に刊行することを目指して編集会議を行った。また、写真画像の撮影、保存の試みのひとつとして、黒田清輝遺族より寄贈された関連資料のうち、当時の写真をその質感を再現すべくデジタル撮影および出力を行った(成果は「写された黒田清輝」にて展示)。

今年度の他機関との共同調査研究作品は以下である。

宮内庁三の丸尚蔵館(「春日権現験記絵巻」07.4.9~20、11.27~12.17)、奈良国立博物館(「天台高僧像」07.9.10~14)、彦根城博物館(「彦根屏風」07.11.6~15)、国立故宮博物院(孫過庭筆「書譜」08.1.28~2.1)

2. 高精細デジタルコンテンツとしての形成画像とその多目的利用：脆弱な材料で構成されている我国の貴重な文化財を間近で精査・鑑賞する機会は限定されている。文化財の高精細な画像や特殊撮影画像を公開し、多目的な利用に供することは、文化財への理解を深め、実物の保存と共に活用の道を開く有効な方法である。

デジタルコンテンツの多目的利用の一環である画像展示を以下の場所で開催した。

・黒田記念館特集展示

- ① 当所蔵黒田清輝筆「智・感・情」「湖畔」ほかの画像展示 黒田記念館(07.4~)
- ② 「写された黒田清輝」黒田記念館(07.11.15~)

・国宝「彦根屏風」特殊撮影画像展示(「よみがえった国宝・彦根屏風と湖東焼の精華」、彦根城博物館、07.9.28~10.26)

3. 調査作品：絵画：「天台高僧像」(奈良国立博物館)、「彦根屏風」(彦根城博物館)、孫過庭筆「書譜」(国立故宮博物院・台湾)、彫刻：龍門石窟
4. 研究発表 1件：城野誠治 彦根城博物館 07.10.20
5. 論文 5件：城野誠治「光学的手法による国宝・彦根屏風の調査」『国宝 彦根屏風』pp.121-124(08.3)、江村知子「彦根屏風の表現について」『同』pp.145-160(08.3)、城野誠治「光学的手法による国宝・吉祥天像の調査」『薬師寺所蔵 国宝 麻布著色吉祥天像』pp.93-95(08.3)、早川泰弘・城野誠治「吉祥天像のX線透過画像について」『同』pp.74-75(08.3)、城野誠治「2006年の写真の進歩 文化財」『日本写真学会誌』2007年70-3、pp.170-171(07.7)

研究組織

○中野照男、山梨絵美子、皿井舞、江村知子、城野誠治、鳥光美佳子(以上、企画情報部)